二上山

香芝市二上山博物館　■全国初　旧石器文化を紹介する石の博物館■

NIJYOSAN MUSEUM KASHIBA-CITY　　二上山と３つの石　よみがえる旧石器時代

展示解説シート No.6

マサイとドゴン、そして原始絵画

―東西アフリカの民族文化―　　平成20年度スポット展

アフリカの国々

はじめに

アフリカには人類の原郷があります。

アフリカの中部から北部を7度に分けて訪ねてきましたが、その一端をスポット展として皆さんに紹介したいと思います。そこには、歴史的に日本と直接の関係はありませんが、古代日本の出土品と共通するものを見つけることができます。

「ヒトは同じようなことを考えるもんだな」という感じで、何かを見つけて下さい。

石野博信・香芝市二上山博物館館長

エジプト（Egypt）　1990年12月

スフィンクスは守護神

「エジプトはナイルの賜物」と言われるほどナイル川が文明の母であり、ピラミッドなどを生み出しています。国立博物館のツタンカーメン王墓の出土品の中にあるミニチュアの「パンを運ぶ人」や「洗濯する人」などが市場の片隅にころがっていました。本物でしょうか？怖いお兄さんに拉致された薄暗い個人宅には、一人のおばあさんが腰掛けていて、傍らには出土品らしいものが並んでいました。買わないと帰らせてもらえそうもないので、青ガラス製の小さな「守護神像」と「眼」を手に取ったら、さかんに「本物だ」という雰囲気の身振り。「偽物でもよくできている」と思って買った。ついでにカメラを向けて「写真を撮ってもいいか」というポーズをしたら「OK」という返事だったので、喜んでエジプトの個人宅の室内を撮りまくった。世界各地の伝統的民家を見るのが好きなので、いい機会であった。

ルクソールの「王家の谷」に向かう途中の道端で、現代の素焼きの壺などを並べて売っていたので、バスを止めてもらい購入。大小4個で6ポンド（＝約120円）であった。バスに戻り、現地ガイドさんにエジプト文字で壺に私の名前を書いてもらった。

アスワンハイダム近くの有名な「造りかけのオベリスク（尖塔）」の傍らの屋台で、エジプトコーヒーを体験。エスプレッソよりもドロッとした感じが伝わってくる。

エジプトの見ザル、聞がザル、言わザル

ケニア（Kenya)、タンザニア（Tanzania）　2004年9月

マサイ族の家と人びと

日本のテレビCMにケニアのマサイ族の映像がさかんに流れていた頃、女房に誘われて「サファリツアー」に出かけた。私は動物より人間に興味があるので、マサイ族の村に出かけた。村はイバラの枝で二重に囲まれ、中に13軒の家がある。すべて村長の奥さんたちの家で、今夜泊まる家の前にはヤリが立っていた。観光客に開放している村は少ないが、その中に土産物が並んでいた。眺めていたら男根をモデルにしたような棍棒（こんぼう）が眼に付いたので、聞いてみると「そうだ」という。2本で3ドル（＝約360円）であった。行事のとき、偉い人が手に持って歩くそうだ。日本の縄文時代には、男根型の石棒が祭場に立ち並んでいた。「豊饒（ほうじょう）を願う祭り」は人類共通なのだろう。

タンザニアを象徴する山はキリマンジャロ。そして国内のオルドバイ峡谷は400万年前にアウストラロピテクス人が登場したところ。そこには小さな展示場があり、発掘したリーキー夫妻の業績や石器・骨が並んでいた。展示場前には、日本人探検家、関野吉晴の記念碑があった。

ケニアに向かう途中の大型バラックのような土産品店の前に木彫りがずらりと並んでいた。手に取ったら80ドル。なんとか交渉して30ドルになったので購入した。

リーキー夫妻（展示室の写真から）

リビア（Libyan）　2006年3月

岩絵をさがす　アカクス山中

リビアは砂漠の国、そして砂漠の中の岩山に数千年前の岩壁画が描かれている国。ジープとテントの旅2週間に出かけた。狩る人、精霊、動物など、雰囲気は弥生土器に描かれた人びとと似ている。岩画のある岩陰の下には赤や青の岩石を潰して絵具とした痕跡がある。

砂漠の真っ只中に割れた石が転がっていた。石器のようにも見えるが、まわりは砂と石だけ。写真を撮りながら、小さい石を1個だけ拾って持ち帰った。後日、旧石器が専門の佐藤良二（香芝市教育委員会生涯学習課主査）に見てもらったが「どうでしょう？」という感じ。

エチオピア（Ethiopia）　2006年6月

土器焼きの村（ワライタ族）

砂漠のリビアへの旅の後、森林のあるエチオピアに行くことになった。エチオピアでは事件が起きた。

ショウワ族の小さな村。家の中に入ってもよいとのことなので、そのうちの1軒に入った。壁に宝貝付き壺やけいたい用腰掛けが掛けてあった。写真はOKということで撮った後、中にいた若嫁さんに腰掛けをいくらだったら譲ってもらえるかと聞いたら20ブル（＝約300円）とのことで商談成立。腰掛けを手に村の中をブラブラ歩いていると、姑らしき人が猛烈な勢いで追いかけてきて腰掛けを取り返そうとする。現地のガイドさんは「バスに入れ」という。あまりの勢いに負けて腰掛けを返したら、お金もきちんと返してくれた。ガイドさんによると、腰掛けは姑さんのお父さんの形見らしい。それを知ってか知らずか、若嫁さんが売ってしまったというのがことの真相。教訓「何でも欲しがるな。」

バスは休憩のため、街道沿いの村に止まった。眼の前に土器を焼いている家がある。降りて眺めていたら、大壺を抱え

た青年が現れ、買えという仕草。見ると、「高さが約60cm。胴部の上半分はヘラ磨き、下半分はヘラ削りのあと牛糞を塗る。頸部には凹線文」といった、まるで弥生土器の説明のような文になる。交渉により10ブル（＝約150円）で購入。寝袋に包み、以後、毎日子どものように抱きかかえ、日本にたどり着いた。また、ガイドさんの交渉で、その家の前に転がっていたススの着いた土鍋を20ブル（＝約300円）で購入した。思いが深いのは大壺だ。奈良県立橿原考古学研究所の弥生土器研究者が実測させてほしいと言ってきた。

道を歩いていると、口に円板をはめ込んでいる女性に出会った。これは口飾りといい、土製円板の大きさは3～10cmぐらいまである。小さいものは耳たぶに穴をあけて耳飾りとしても使っている。よく見ると円板には文様が刻んであって、まるで縄文時代の滑車型耳飾とそっくり。奈良県では橿原遺跡から沢山出土している。

弥生土器？買った大壺

マリ（Mali）　2008年2月

鉄鐸をつくる

アフリカ西部の大河、ニジェール川を舟で往来して見たい。川田順造さんの『ニジェール川大湾曲部の自然と文化』を読んで以来憧れていた。マリとブルキナファソにまたがる15日間の旅に出発だ。

マリの初日、首都バコスのリサイクル市場の一画で鉄鐸に出会った。長野県諏訪大社の神事に登場する杖頭の鉄鐸群が有名だが、平安時代の遺跡からも稀に出土する。とにかく購入したが、数日後、ドゴン族の踊りの場で実際に打ち鳴らしている鉄鐸を見て感動した。

泥壁の教会ジェンネは屋台のむれ。歩いていると、金属の彫刻を持った人がずっとついてくる。欲しそうな顔をしていたらしい。歩きながら仲間が値段交渉。2体で50,000セファフランが20,000セファフラン（＝約4,000円）となったので購入した。

ニジェール川の舟旅で、川沿いのボゾ族の村に有名な歌手の家があるとのことで上陸した。白人の一団は群がっていたが、私は門前の屋台をのぞいていた。土産品を載せた棚の下に石斧が転がっていた。値段を聞いてびっくり。2個で800円程度。縄文時代の石斧とそっくりで、やっぱり買ってしまった。

舟旅が終わり、川港でバスを待っていたとき、おじいさんが火打鉄を使って一生懸命に火を起こそうとしていた。曲げた鉄に石を当て、モグサに火を付ける。おもしろそうなので頼んで売ってもらった。しかし、それは売るためのデモだったようだ。まあ実演してもらったのだからよしとしよう。

火打鉄と石で火をおこす

ドゴン族　土の家

ドゴン族のイレリ村　石柱の集会所

ドゴン族の村に泊まった。土壁の建物で、屋上に布団を敷いてゴロ寝。上は満天の星、気持ちがいい。食事にスープが入った木椀が出てきた。オーナーにきてもらい譲ってほしいと交渉。「これは工芸品だから譲れない。どうしてもというなら高い」という。1個800円であった。後日、市場で同じ物が300円で売っていた。

宿舎にはいたるところに木彫りが並ぶ。メンバーがほこりをかぶって床に寝ていた木彫りの亀を10,000円で買ってきた。言い値は30,000円とか。

ドゴン族　仮面のまつり

ドゴン族のまつり（鉄鐸を叩く）

19世紀に白人の探検家たちが目指したトウンブクトウ市内には、たどりついた白人たちの家が残されている。伝統的住居の1つが博物館として活用されており、その一室に石蛇が祭られていた。蛇の信仰は世界的で、日本にも蛇がからむ縄文土器があるし、大和の神体山である三輪山の白蛇も有名だ。

宿の土産売場で石蛇を売っていた。神様も売られるらしい。

マリからブルキナファソに入った。金属の彫像が有名で、市場の骨董店をのぞいて見た。「見ザル言わザル聞かザル」がおもしろい。ドゴン族の村にもあったが、ここではセットで揃っていた。1990年にエジプトのガソリンスタンドで始めて三猿を見たときは、日本人観光客が悪戯で置いて帰ったのだろうかと思っていた。その後、三猿は世界的な広がりがあることを知った。そして再び、アフリカ西部で出会ったのだ。「欲しそうな顔のまま、言い値で買って嬉しそうにしていた」とメンバーの1人に言われた。

ドゴンの木彫群　三猿の一つ　見ザル

民族調査にはほど遠い、個人の短期間の旅。観光地化されていない地域は苦労も多いが新しい発見がまた楽しい。　＊掲載写真はすべて石野博信が撮影した。

引用文献

①川田順造　1997　『ニジェール川大湾曲部の自然と文化』　東京大学出版会
②福井市美術館・(株)東京かんかん編　2004　『アフリカ仮面と神話の世界―聖なるかたち・大地のちから―』　(株)東京かんかん
③マイセル・グリオール（坂井信三＋竹沢尚一郎＝訳）　1997　『水の神―ドゴン族の神話的世界―』　せりか書房

スポット展講演会

「サハラ砂漠の原始絵画と古代日本」

講師　石野博信・香芝市二上山博物館館長

日時　3月14日（日）午後2時～（1時開場）
会場　ふたかみ文化センター2階・第1～3会議室
定員　100人（当日先着順）
事前の申し込みは不要です。
*当日発行の二上山博物館特別観覧券が必要です。

展示解説シート　No. 6

平成21年2月21日発行

二上山博物館
〒639-0243　奈良県香芝市藤山一丁目17番17号
TEL.0745-77-1700　FAX.0745-77-1601
E-mail　nijyouzan@city.kashiba.lg.jp